

# Juichi WAKISAKA Race Report

2013 AUTOBACS SUPER GT Round 7 -SUPER GT IN KYUSYU 300KM-

◆◆ 粘りの走りでポジションアップ、力走が実り7位でチェッカー！ ◆◆

No. 39 DENSO KOBELCO SC430		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 石浦 宏明	13位	7位

開催日：2013年10月5日-2013年10月6日

サーキット：オートポリス（大分県日田市、コース全長：4.674km）

レース距離：65周（303.81km）

入場者数：予選日11,600名、決勝日22,100名、合計33,700名

今シーズンもいよいよ残り2戦となったSUPER GT。セミアイナル戦にあたる今回の戦いは、大分・オートポリスが舞台となる。タイトル争いが佳境を迎える今回、チームもなんとかしてこの一戦で優勝、大量ポイント獲得を達成し、最終戦もてぎまで王者獲得の可能性を残しておきたいところだ。

一方で、着実に、そして緻密にレース戦略を組んで戦いを迎えたいと願う各チームの思いとは裏腹に、オートポリスのレースウィークはとても慌ただしいものになってしまった。というのも、搬入日にあたる金曜こそ安定した初秋の天気恵まれたが、予選日の土曜は朝から雨になり、時折激しい風を伴って強く降り続けることに。加えて霧も発生し、走行中の安全を確保するには極めて厳しいコンディションとなっていたからだ。

結局、土曜日の走行セッションは公式練習をわずが行っただけに終わり、午後からの予選セッションはキャンセルへ。日曜日の朝から予選を実施する特例が取られた。事実上のワンデーレースとなった当日、予選で13番手というポジションに甘んじたNo.39 DENSO KOBELCO SC430だったが、その後の決勝では力走が実り、7位入賞を果たしている。



## ■ 10月5日(土)

09:00-11:00 公式練習

14:15-14:30 ハックアウト予選 (Q1) ※悪天候により中止

15:00-15:12 ハックアウト予選 (Q2) ※悪天候により中止

### 【公式練習】 9番手 / 1'56.497

シリーズも大詰めを迎えた今シーズンの戦い。舞台となるオートポリスはアップダウンの激しいレイアウトを持ち、またタイヤに対して攻撃性のあるサーキットとして知られる。また例年、荒れた展開になるケースも多く、最後の最後までなにが起こるかわからないタフな戦いになることが予想された。

そんな中、午前9時からスタートした公式練習。折りからの台風23号の影響か、サーキットは朝から弱い雨が降っていた。だが不安定な天候のせいで、セッションがスタートするとめまぐるしく天候に変化が表れ激しい雨に。加えて、濃い霧による視界不良という悪天候へと変貌した。気温16度、路面温度17度というコンディションの中、まずNo.39 DENSO KOBELCO SC430のステアリングを石浦宏明選手が握り、コースへと向う。途中、1台の車両がコースアウトしたのを機に赤旗中断となり、その10分後にはセッション再開となったものの、叩きつけるような雨と濃霧によって、走行可能とは言えない状態に。結果、9時48分の段階で視界不良のための赤旗が提示され、そのまま終了時刻を迎えるという極めて稀な形でセッションを終えている。



### 【公式予選】 悪天候により中止

その後、スケジュール通り午後2時からの予選が予定されていたのだが、その直前になっても天候の回復は見られず。安全面を考慮し、この日の公式予選はキャンセルされることが発表された。結果、日曜日の朝から予選を実施、その際、ハックアウト方式ではなく、1名のドライバーによる25分間のタイムアタックにて決勝グリッドを争うという方式を採用することが発表されている。



## ■ 10月6日(日)

09:25-09:50 公式予選 (10:00-10:20 サーキットサファリ)

14:00- 決勝 (65周)

### 【公式予選】 13番手 / 1'39.569

薄曇りながら晴れた朝を迎えたオートポリス。だが、午前9時25分からのGT500の公式予選を前にパラパラと雨が降る不安定なコンディションとなった。セッションを前にウェット宣言が出されたが、スリックタイヤでコースイン。また、このセッションではタイヤを2セット使用することが可能となり、予選終了後の抽選でそのどちらかがスタート用タイヤとして指定されることになった。

気温20度、路面温度21度と前日より数値が上がったコンディションの中、No.39 DENSO KOBELCO SC430のステアリングを握ったのは石浦選手。タイヤに熱を入れるのが難しい状況でのアタックとなり、2セット目のタイヤでベストタイム更新となる1分39秒569をマーク。だが、ライバル勢もタイムを削り、No.39 DENSO KOBELCO SC430は13番手で予選を終えることになった。

その後、コース上ではSUPER GT恒例のサーキットサファリが実施され、このタイミングで脇阪がコースイン。レースウィーク初めとなるドライブを行い、タイヤの皮むきをはじめ、クルマのフィーリングを確認している。「もてぎでのテストの流れでクルマを用意して持ち込んだのですが、クルマが思うように曲がりませんでした。アンダーステアが強かったですね」と走行後にフィーリングを語った脇阪。いつも以上に限られた時間の中で、いかに自分たちのレースをするのか。ギリギリまでミーティングを重ね、決勝に向けて尽力した。



## 【決勝】 7位 / 4ポイント獲得（シリーズポイント：41ポイント、シリーズランキング：8位）

午後からの決勝を前に、徐々に天候が安定。決勝直前には、通常のウォームアップよりも7分時間を延長して15分間のセッションが実施された。全車ダミーグリッドにつき、気温22度、路面温度24度の中でローリングスタートが切って落とされようとしていた。一方、グリッド上でも最後の調整を続けたNo.39 DENSO KOBELCO SC430のノックピットには脇阪の姿が。いつもとオーダーを変えることで新たなチャンスを呼ぼうという狙いがあったようだ。

まず、13番手でオープニングラップを終えた脇阪。落ち着かないコンディション、さらにはオートポリスならではのタイヤコントロールを加味し、確実にチャンスを伺いながら勝負に出るという戦略で周回を重ねていく。タイヤのピックアップも懸念材料のひとつで、チームではタイヤの内圧を適度に調整してレースに挑んだが、それでも現状は厳しい。とりわけGT300の車両をパスするためにラインを外すとタイヤが滑るようになり、ポジションアップのためにペースアップすることが難しい状況になってしまった。

レースは30周を終えて脇阪がピットイン。ポジションキープのまま石浦選手へとバトンをつなぐ。なお、チームでは、前半のステイントを担当した脇阪からのタイヤインプレッションを参考に、石浦選手が装着するタイヤの内圧を変更。これが奏功し、石浦選手はいいペースで周回を重ねていく。すると、次第にポジション争いのチャンスも増え、次々とオーバーテイクに成功。40周目には10番手、45周目にはシングルポジションの9番手へと浮上する。

その後も安定した速さを武器に逆転のチャンスを狙い続けた石浦選手は、終盤に入って4、5番手争いに加わる勢いを見せる。緊迫した戦いでサーキット場内を沸かすことになり、結果、7位でフィニッシュを果たすことになった。



レースを終えた脇阪は、「スタートを久しぶりに担当し、新鮮な気持ちで戦うことができた」と笑顔を見せた。一方で、「タイヤのピックアップが心配でタイヤの内圧を高めにしたものの、うまく走れなかったため、その後、石浦選手が担当する際には内圧を落としていったところ、いいペースで走れたようです。素晴らしい走りを見せてくれて7位でレースを終えることができた」とタフな戦いを振り返った。

今回のレースでチームとしての底力を見せたNo.39 DENSO KOBELCO SC430は、4ポイントを計上。ランキングトップとは17ポイント差ではあるが、最終戦でのチャンピオン争いに名を連ねることになった。

いよいよ11月2日(土)・3日(日)、ツインリンクもてぎ（栃木県芳賀郡）を舞台にシーズン最後、そしてSC430でのラストレースが開催される。

[Photo Gallery]



